

# メダカ豆知識



メダカは胃がないので、エサを大量に取り込めないと生きない。口の構造に合ったエサを少しずつ数回にわけて負担をかけるようにあげるとよい。

メダカにとってエサのやりすぎは厳禁。エサは、やたらやるほど食べられ、内臓をいためて死んでしまう。エサはほんの少し、食べきれずだけ少しだけやること。特に秋から冬は、エサを食べないので、朝はせめて暖かい日中にあげるとよい。やりすぎると水も悪る。

水そうに入れる赤玉土は中粒が適。冬は土の下にもぐろうとするので、粒が大きいと、体にキズをつけてしまう。

エサやりすぎで水が汚れて栄養過多になると藻が発生する。

団んぼの土が成長がよい感じがある。

5度以下ではほとんど動かさず冬眠状態。

春一番に生まれたメダカは成長も早く、その年の夏には産卵する。しかし、6月7月の子は、成長がとてもおそい。

メダカの寿命は長くて3年。卵を産ませたら1年で死ぬこともある。しかし卵を探っていないと固有種として存続していない。

同じ種類で飼育しないと雑種になる。

大人のメダカは45日エサをやらなくても死にはしない。

留守中の分を多く与えるのはNG。



魚を見ていると時忘れ。

稚魚が生まれたら水を変えないこと。できれば卵から2~3月は動かさない方がよい。卵を産んだら親を動かさず、きれいな水を入れた水そうに卵をつけておくとよい。

生まれたばかりの稚魚(針子)は水圧をもちろて水中に入れず、水面を泳ぐ。

稚魚は赤ちゃんといわれ、養分をためこめないので、1日に3回くらいにわけて、ちよとエサをやること。

メダカは1年飼って見ないとわからない。揚貴妃など赤いメダカは1年たてないと赤い色は出てこない。また、太陽の光にあててやらないと赤くならない。ヒメダカのようにうまい時もあるのだから、よく太陽光にあててやること。1年間は飼うとおもしろい。

冬場はいっぱい太陽にあててやること。日照時間がのびて水温があがると2月下旬頃から産卵をはじめ。この頃が一番子がうんとえい。

ぐせてくると弱っていること。背中が曲がっていると弱くなっている。

産卵からふ化まで「250℃日」。25℃の水温では10日くらいでふ化する。

メダカの敵

トンボの幼虫のヤゴやカエル、ボウフラも敵。ボウフラは羽化する前に稚魚をおそって食べてしまう。親にとってはボウフラはエサになる。

水かえ

水はしょっちゅう変えないこと。

幹之も1年飼って見ないと、背中の光がどうなるかわからないからおもしろい。

タリマシはかわいいが、飼育がむずかしい。

土佐山田の工科大入口にある「メダカのお庭」のおじさんにいろいろとメダカ飼育のノウハウを教わってよかったことをここに記しています。



トンボが水そうに卵をうみつけ取らぬように注意。



水そうにわいてくるタニシは特に害にならない。

ホテイアオイなどにつく、ゼリーみたいなドロっとしたものは貝の卵。



ガラスの水そうを飼うと、いつも見られてストレスをうけるので、長生きできない。夏には水温も高くなる。メダカのためにはガラスの水そうはさけた方がよい。

真冬は氷が張っても生きている。真夏にかなり水温が上がって生きている。水替えをあんまりなくしてあげると、こんな悪条件にもくしけお適応していく生命力がある。ただし急激な水温の変化は、とても弱くて、別の水そうに移るときには、ゆっくりと水温に慣らしてあげることが大切。



パンダ

